

---

# クーゲルシュライバー！

織部鶉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クーゲルシュライバー！

### 【Nコード】

N2682Z

### 【作者名】

織部鶉

### 【あらすじ】

人一倍女性の嗅覚に敏感な俺”常葉出水”は、2階の窓から落ちてきたニーソックスを手にとって臭いを確かめる。そして、ニーソックスを取りに来た見知らぬ少女に向かって言った。

「これ……美靴のニーソックスだろ」

「私は、彼女の事が好きなの！！」

しかしその少女の告白が、俺の高校生活を大きく捻じ曲げた。

俺の幼馴染である女の子”澄川美靴”を本気で好きだと言う同級生”綿峰ちこり”は、男女の性格を持つ二重人格者だった！

そんな彼女の恋路を無理矢理応援する事になってしまった俺は、美靴の好きなライトノベルを趣旨とした部活動を作る提案をする。その目的は、美靴をちこりの近くに引き入れる事だった。

案に乗って部長を務める事になるオタク少女”猫井こみみ”と、ちこりの友達である”五木一枝”は本気で部活を作ろうとしたが、突然ちこりが猛反発を始めてしまい……

たった一つの告白から始まる、青春ライトノベル執筆ストーリー！。

《クーゲルシュライバー！》

## プロローグ

### プロローグ

> i 3 6 8 1 5 — 2 8 8 3 <

「それだけは……絶対に嫌だっ!!」

教室というには設備がお粗末な旧校舎の一室で、突然彼女は机を叩いて立ち上がった。

「ラノベなんか……臭くて、ダサくて、欲望だけは一人前のキモオタが読むものだったの……。それを作ったりしてる奴らなんかは、碌でもない妄想をトレンドだと言いたげにゴミを量産し続ける……。そんな職を目指す奴に至っては、何も出来ないクズのクセに、小学生以下の文才でゴミを他人に送りつけ、その程度で人の上に立つ事を妄想しているんだ!!」

《綿峰 わたみね ちこり》は背中の中程まで伸びた髪をブワツと逆立たせ、怒りに歯を軋ませながら唸っている。まるで人が変わったようだった。

「お、落ち着けてちこり!」

そんな彼女の変貌に驚きつつ声を掛けてみるが

「っさい出水いずみ!!」

張り上げられた怒声に、情けないながらも怖気づいてしまう。

初めて会ってからそれほど時間は経ってないが、俺の知る限りちこりはこんな口調で話すような子ではなかった。もっと大人しいどころか、むしろ控えめ過ぎるとすら言える子だった。

「あれれ……何かこみみ、聞き逃しちゃいけないような言葉が聞こえたなあ……」

部屋の中央に四つの机と椅子が寄せられている中、1人だけ口―

ラー付きの回転椅子に座っていたツインテールの少女、《猫井こみみ》が不穏な声を口にする。彼女が椅子から降りると、その様子を鋭い目つきで見えていたちこりが顎を引いた。そして、野良の子猫でも見ているかのような口調で言ってしまったのだ。

「……小っさ」

プチン、と何かが千切れた様な感覚が俺のところにも伝わってきた。

「ああん!? 今こみみのプチ切れランキングを1、2フィニッシュじゃがったなこんにゃろ!!! ラノベをバカにするのは単に良さが分かってないだけだろうけどね! 今! こみみが小さいってのは!!! 関係ないでしょうが っ!!!」

こみみは使っていた回転椅子の上にサツと飛び上がってから、内部にある支柱スプリングの力を利用してちこりに飛び掛かるうとする。

「んゝにあっ!?!」

しかしどこにも悶つかえていないローラー付きの椅子を蹴って飛び上がれば、椅子だけが滑ってその場に落ちるのは誰でも判るはずだった。顎から落ちればさぞ痛いだろう。こみみはまさにその恰好で、床に打ち付けた顎をさすりながら目じりに涙を浮かべていた。

「ぎぎぎい……」

「……なんだよメスネコ」

今にも取っ組み合いが始まりそうな程に場は緊張していた。とても收拾が付きそうにない。

俺はどうすれば良いかひたすら考えあぐねていた。今二人の間に入っても、出来る事なんてたかが知れている。油を注いでとぼちちりを喰らうのはもつと勘弁して欲しい。

しかし俺は一人じゃなかった。机の向かいには、同じようにどうすれば良いのか悩んでいそうな表情をしている女子が座っていた。

「ち……ちよつと2人とも、ここには何のために来たのよ! ちこ

も急にどうしたっていうの？」

彼女は意を決したのか、一度唾を飲んでからこう着しかけている二人に声を掛けた。

「ちっ……黙ってる五木。今お前には関係のない話だから」

ちこりはまったく顔に合わない声色と言葉で、場を収めようとした彼女を威圧した。

「な、なんですっ！……て、いやいや落ち着け私……」

黒髪をポニーテールにまとめ上げた彼女《五木 一枝》は、頭を小刻みに振るって心を落ち着けようとしていた。一枝は入学以来、同じクラスである為か、ずっとちこりとの友人関係があつたらしい。それなら、彼女の豹変ぶりについて知っているかどうかはともかく、この場を収めてもらうには一枝の力を借りるしかなかった。

「と、とにかく、ちこは落ち着いて。こみも理由ぐらいは聞いてあげようよ」

あくまで落ち着いた態度を示しながら二人を落ち着けようとするが、当人達は一切一枝に振り向きもせず睨み合う。

「あなたのお願いを叶えてあげるために集まってるんだよ！ 見損なつたよバカちこ！ バカちこ！！」

「ギヤーギヤーギヤーとうるせーなメスネコ……！ 俺はな、単にラノベを馬鹿にしたいんじゃないやねえ。俺の経験を以って言ってるんだよ！ その辺のレビュアーと一緒に語んじゃねー！」

「だあかあるア……人の話聞けってんのがゴルアア……！！」

いつのまに淑女な態度はどこへやら、一枝はその存在を流された末に、濁流の中へ飲み込まれてしまったようだ。まったく笑えない。

それから取っ組み合いのケンカに至るまでは数秒も掛からなかった。見た目はちゃんと女の子の子供の子している三人が、耳を塞がずには居られないような雑言を口にしながら、互いのセーラー服を引っ張り合っている。

その混戦の中から飛び出たちこりの一言だけが妙に俺の耳に残る。

「じらっ……俺に触んな!!」

俺　と自称する女子は居ない訳ではない。ただちこりの容姿・秀囲気に限っては明らかに違和感があった上、今までは”わたし”と弱弱しい声で言っていたはずだ。これはやはり……そういう事なのだろうか？ いや、この際間違いないはずだ。

「ちよつと待ってくれ」

俺はゆつくりと立ち上がってからキヤットファイトの猛火立つ場所に近づくと、あえて神妙な声色を意識しながら呼びかけた。すると暴れていた三人は、ピタリと手を止めてこちらの方に向いた。俺自身はその反応を見越してやる程の策士ではなが、しかしながらこのチャンスを逃す訳にはいかなかった。

「何よ出水」

一枝はジト目で俺を睨む。一瞬で匙を投げてしまった自分を見てほしくないのか、どこか疎ましさを思わせる眼力を向けてくる。

「……なんなのイズミ」

不機嫌一色といった顔をしたこみみは、口を横長に伸ばしながら鼻にかかった声で言う。

そんな状況下でも確かめる必要があったのだ。この騒動のトリガを引いてしまった者……綿峰　ちこりの正体を。

「ちこ」

「な、何だよ……」

一度肺に残った全ての空気を吐き出してからちこりに一歩近づく。そしてかすかに漂うチェリーっぽい香りを胸いっぱい吸いこんでから、俺は彼女との体の距離をグツと縮めた。迫りくる俺に対し彼女はとつさに手を構えてきたが、下段のガードは甘かったようだ。

「うりゃ」

「えっ」

無い

無い　　ない、無い無いないッ！

俺は左手を背中に回して体を寄せ、右手をスカートの中へ一思いに手を突っ込んだ。

すぐに触れたのはやけに柔らかく滑らかな布地。おかしい……どれだけ擦つても、ここにあるはずの“棒”が無いのだ。

「あぐっ……！」

息を気管の途中で詰まらせたような声を漏らす彼女。俺はただただ不可解だった。ちこりの唐突な変貌、口調の変化……その原因はこう考えるしかないはずなのに。

「お前……女装した男じゃなかったのか？」

……どこからかカウベルの間抜けな音が聞こえた気がした。

そうだよ、変装した男じゃなきゃおかしいはずなんだ。初めて俺と会ったときだって、今に至る理由や目的だって、ちこりが女装をした男と考えれば全てつじつまが合う！ それを立証するための一番確実な方法を、俺は今、正直に、確実に試しただけだ！

「ひっ……あう……」

ふと顔を上げると、彼……ではなく彼女の大きな目にじわっと涙が浮かんだ。手をスカートの中に突っ込める距離なのだから、顔と顔は息遣いが届く間合いだ。少し目を逸らせば、ひくひくと動く鼻の動きまでハッキリ覗える。

俺が“棒”の探索を諦めて手を引くと、ちこりは崩れ落ちるようにしてその場に倒れた。さすがに、いきなり体に触れたらショックなのだろうか。でもちこついている？ と直接聞くよりはよっぽど健全だし、答える側のデリカシーは守られるし、その上でとっさの嘘をつく事が出来ない。

しかし、何で俺がわざわざ確かめ

「どうばッ!!」

たった1フレーム、俺の視界に四本の鉄パイプ 椅子の足部分が見えた。

次の瞬間、物凄い衝撃が俺の顔面に訪れると共に、意識は肉体の外へと吹き飛ばされてしまった。

……ああ、走馬灯が見える。

> i 3 6 8 1 6 | 2 8 8 3 <

## 綿峰 ちこりの告白

### 《綿峰 ちこりの告白》

満開に咲く桜の美しさは、春の季節を迎えれば誰であれ感じられる。

ただほとんどの人は、その美しい瞬間でしか桜を見ようとしない。散ってしまった花弁が、雨に打たれ茶色く萎びる風景は、誰も記憶にとどめておこうとは思わないものだ。

うちの高校の校庭に植えられた200本以上の桜は、全国で見ても尋常じゃない咲き方をする。学校の敷地自体が東京都区内のど真ん中にあるにもかかわらず、今年のピーク時には《地上の雲》と称される桜の空撮写真と、花見をさせると校庭に都民がなだれ込んで来たという出来事がニュースで放映された程だ。

その桜も今となっては見向きもされぬ、もつさりと若緑の葉を纏った微妙な姿をしている。

落ちて腐った花弁は地面の土と合わさり、ずっしりと重くなっている。そんな場所に積み上げられている。正直、気持ちの良い光景ではない。

「……何でだろうなあ、こんな仕事を」

放課後。部活に飛び出す生徒たちをしり目に、俺は竹ぼうきを片手に校舎回りをトボトボと歩いていく。

校舎の隅に寄せられた花弁は、ゴミ袋にまとめて処理場に出さなければならぬ。その役目は必ず誰かがやる事になる訳だが、俺はこの仕事を今日まで五日間毎日やらされている。

苛められている訳じゃない。確かにクラスで少し変人扱いをされている節こそ有るが、理由はもつと単純。暇な奴、つまりは部活

動に入つてなければ、生徒として役員を務めている訳でもないからだ。

「ここまで来ると慣れたもんだな。よいしょっと」

この手際はそこらの用務員なんかに負けない、なんて一人で意地を張りながら集められたゴミを袋に詰め、それを校舎の壁を背に積み上げる。ノルマを済ませたらあとはひたすらゴミ置き場へと往復するだけ。時折空を仰ぎたくなる程に退屈な作業だ。

「げっ……この花弁、雨水吸ったまま乾いてねーぞ」

乾いた状態なら竹ぼうきを振るうだけで片は付くが、水を吸っていると話が変わる。地面にへばりついて簡単に取れないうえ、堆積したものに至っては溶け始めた雪の様に重い。

「スコップ先生を持ってくるしかないな。えーとどこかに掃除用具箱なかつたっけ……」

クラス会で押し付けられるようにこの仕事を任された時、担任の男は「学校を覚える機会にもなる生徒会役員になる時も有利だぞ」と励ましの言葉を送ってくれた。クソありがたい配慮だけど、俺が役員になることは事情により無理に等しい。信任投票ですら怪しいレベルだ。

その理由は俺自身にある。

自分にとっては普通の事であるが、他人には受け入れがたい行為と趣向らしい。それでも俺は改める気がないから、正直に生きていくにはこうして肅々と押し付け仕事をこなすしかないのだ。

憎らしい花弁どもを片付ける正義の味方スコップはどこに行ったか。たしか二日前使った時にはこの辺りにあったはず……と、まだ慣れない感覚に齒がゆい思いをしながら校舎を壁沿いに歩く。入学したての一年生にはこれだけで十分なストレスだ。

遠目にはコートの中で跳ねたり叫んだりしているハンドボールやテニス部員の姿が見え、後ろの方からは野球部員の不揃いで妙にグルーヴな掛け声が聞こえる。頭上からは吹奏楽部による野太くて艶

のある金管楽器の音が響いていた。まるで青春の一日一秒をこんな事に費やしている俺を囁し立てているようだ。それから逃れようとしたのか、あるいは本当にスコップのありかを思い出したのか。どつちとつかぬ歩調で辿りついたのは、校舎の北側に当たる湿った日陰の細道だった。

「そうだそうだ、確かこの辺に掃除用具箱が」

都の街と学校の敷地を仕切る壁と、四階建ての校舎に挟まれたこの辺りは、一日を通して日が当たらない為に地面がなかなかぬかるんでいる。当然、こんな暗い所に人通りなんて無いに等しい。そんな所でも掃除してしまおうと思ってしまう俺は、やはり暇人であった。

目的の掃除用具箱を探して心当たりのある所を歩く。他の生徒たちの声は遠ざかり、少し心が落ち着いた気がした。

そのおかげで、俺の能力はかなり鋭くなっていたようだ。

「あれ……ってもしかして」

気配を感じた俺はとっさに辺りを見渡す。すると、コケのおかげでぬかるんでいない地面に布っぽい何かが落ちているのを見つけた。やけに縦に長い黒色の生地……普通の人間には一瞬で理解出来ないだろう。

だが俺には解る。その布に染みついた、芳しい匂いを感じ取ったが故に。

「……何でこんな所にニーソが落ちてるんだ」

布を手を取ってみると確かにそれはニーソックスだった。ユニクロ製ではない。真っ黒と言うよりは少しだけ紺に近く、かの二枚組490円よりもさらに滑らかな肌触り。だらんとぶら下げると、指先や太ももにあたる部分には使用感のあるシワがはっきりと浮かんでいた。

「ほう、なるほど」

一人でうんうんと頷いてから肺に残った息を全て吐き出す。

たまたらん、正直。

使用済みのニーソックスを拾って興奮しない男がどこにいるのだろうか。使っていた人間が分からないなら尚の事良い。好き勝手に妄想すればこのニーソックスは何にでも昇華できる。

だがそれは一般人の話だ。俺はこの能力を以って凡人の向こう側、一歩先へと踏み出せる。

カサツ、という足音。

「あ、あの！ その……その靴しつ、それは……！」

どもった女の子の声が聞こえてふと我に返る。どうやら俺は全神経を右手に持っているニーソックスへと向けていたらしい。そんな隙を見せていた所に、俺の獲物を横取りに来た女に呼び止められてしまったらしい。

「……こほん。えつと、何の用？」

「その、靴下というか、ニーソックスなんだけど……」

「ダメだ」

「えっ！ あの、それ、え!？」

ハイエナ対しては毅然とした態度が適切だ。少しでも気を許せばどこを噛まれて獲物を取られるか分かったものじゃない。

「いやその、それ……私のニーソ……」

その言葉に俺は顔を上げ、寄ってきたハイエナ ではなく、面識のない女子生徒の顔をじつと覗きこんだ。

指定のセーラー服に青いリボン、どうやら同じ一年生らしい。威勢の弱い声や態度を現しているような薄緑の髪は背中の中程まで伸び、もみあげは三つ編みで結ばれている。切りそろえられた前髪の下には大きな目が二つ。口の輪郭は波打っており、なんとも分かりやすい慌て方をしていた。

俺はここに至ってようやく閃く。

「もしかして……これ、君の落とし物なのか？」

「そ……うん！ そうそうなの！ それ私が、さっき二階からここ

に落としちゃって……」

「ふーん。でも今はちゃんとハイソックスを両方付けてるじゃないか」

視線を足元へ落とすと、彼女はこのニーソックスよりも幾分か濃い紺色をしたハイソックスを揃えていた。余分に持っていたニーソックスを落としかのかもしれないが、かといってこいつが“ハイエナ”であるかどうかの疑いが晴れた訳ではない。

「これはその……えと、わたしの替えなんです、そのニーソは」  
「へえ……」

まったく予想通りの回答。いいだろう、そうと来るなら確かめてやる。

「ちよつと失敬」

「あつ!?!」

素早く息を吐き切ってから、俺は手に持っていたニーソックスを鼻に押し付け、穴の中へと吸い込まんとする勢いで匂いを嗅いだ。目の前の女子生徒は単なる驚きか、それとも生理的嫌悪か、強い反応の声を発したが今の俺には関係ない。

答えはこの布に染み込んでいる。

「この匂い……ん　はッ!?!」

鼻腔の粘膜から電流の様なものが走り、全身を駆け巡る。

俺は単純に確かめようとしたのだ。匂いはその人が持つ個人の鍵のような物。このニーソの匂いを確かめ、彼女の靴下も拝借して確かめれば、俺は非礼を詫びニーソックスを返さなければならぬ。

その鍵を嗅ぎ分ける特殊能力が俺にはある。もっともそれは女性の体臭と限られているが……今はそれどころじゃない。

これは感じ取った匂いではなく、言葉で確かめなければならぬ。

「本当に君のニーソックスなの?」

「そ、それは……その……」

「……この匂い。君が本人でなければ、俺の知る友達のものとは思えない。もう一年以上会って無いから今何をしているか分からない

いが……よっぽどないとは思っけど、確かめるために君の名前を教えてくださいませんか？」

「はえっ！？ うう、うう……」

明らかかな動揺。俺はその反応を見越していた。

“俺の知る友達”の姿は、今日の前にいる女子生徒とは見た目も雰囲気も違う。俺が中学二年生の時に転校して以来会ってないが、たった一年でここまで身長も顔も変わるはずはない。いくら女性の見た目にはまったく興味が無いとはいえ、記憶力まで鈍った訳じゃない。

「本当の事を言ってくれないとどうにも出来ないぞ。別に警察や先生へ突き出したりはしないから名前くらいは教えてくれよ」

「ち、ちよつと待って！ 今どこかに突き出されて困るのはどう見てもあなたでしょ！ あああなたから先に名乗ってよ！」

彼女は顔を真っ赤にし、カミカミな口調で吠えてかかる。そろそろ決着のようだ。

「俺は一年A組の常葉 出水、ちよつとした匂い好きだ。どちらかが困るのだといたいのなら、別に今から職員室に行っても良いんだぞ？ 俺の能力についてはもう一部の生徒や職員たちに知れ渡っている。この二一ソの履き主が別にいると証言することも出来るし、信用に足る立証は済んでいる」

「くっ……！」

「ほら、俺は名乗ったぞ。だから急に先生達へ突き出したりはしないから、名前を教えてください」

慌てる態度を見る限りどうにもならなさそうなので、一旦落ち着かせるために声の調子を落とす。逃げられでもしたら面倒な事になりかねない。

「わ、わたしは…… B組の、綿峰 わたみね ちこり……」

判ってはいしたが、その名前は俺の知る友人のものではない。同時に本当の二一ソックスの持ち主でないという事も確定したが、また別の問題が生まれてしまった。

「あれ？ じゃあ何であいつのニーソがこんな所に落ちてて、君が拾いに来たんだ？」

「それは……そ、そうです！ みくちゃんが落としたニーソをわたしが拾いに来たんです！」

「さっきと言ってる事が違うじゃないか」  
「うっ……！」

完全にボロは出切った。

だが彼女　ちこりはもう一人の名前を挙げた。その名前はまさ  
に……

「 “ みくちゃん ” って……まさか、澄川<sup>すみかわ</sup>　美靴<sup>みくつ</sup>の事か？」

「え、何であなたがその名前を？」

一瞬彼女の言っている事が信じられなかった。俺が転校して以来、彼女の動静は全く耳に入ってこなかった。ちこりの言っている事が本当なら、しばらく見ていない澄川　美靴本人が、この学校に居るという事になる。唯一俺の趣向を理解してくれる友達として、気にならない訳がなかった。

「ちよつとどこに行くんですか！」

身を翻した俺の腕をちこりがとつさに掴んで掛かる。

「何だよ綿峰」

「どこに行くのかって聞いてるんです！」

「中学の友達というか、幼馴染に会いに行くために理由が要るのかよ」

「え、幼つ　いや今はそうじゃなくて！　ちよつと待つて欲しいんです！」

引つ張る腕にあまり力が入っていなかったが、必死過ぎる大げさな身振りについ足を止めてしまう。

「安心しろ、このニーソはちゃんとみくに返すから」

「かか、勘弁してくださいい！」

「おまつ……もしかして」

ニーソックスは返して欲しいのに、持ち主である本人へ渡す事は

拒む。つまり事それは

「……………黙って持ち出してきたのか？」

「ああああああっ！ あっ！ あの！ ちょっとだけ、ちょっとだけさっきのあなたみたいに、みくちゃんの匂いを楽しもうと……………！ それで窓際まで持つてきたら、つい手が滑って落としちゃって……………」

「なんだお前もだったのか。その事情だと、確かにみくへ知れたら都合が悪いな」

「というかあなたも勝手に持っていくつもりだったんでしょ……………？ だから、今このやり取りは無かった事にしよう？ ね？ その方がお互いの為になるし……………」

「いいや。女の子同士ながら靴下の匂いを嗅ぐくらい、変人と思われる程度でさほど問題じゃないだろう。俺は命も名誉も青春も賭してこの匂いを求めていると言うのに」

「そこアピールするところなの！？ でも何だか負けた気がする……………じゃなくて！ とにかくみくちゃんの所へ行くのは待つて欲しいの！」

必死過ぎるちこりに再び正面で向き直すと、彼女は掴んでいた腕を放してくれてから視線を地面へ落とした。散々叫んだ拳句落ち込んでいるらしい。

「……………で、今は待つても俺はいずれみくに会いに行くぞ。同じ学校に居るつてのに挨拶もしないのは心地が悪いし」

「ダメなの！」

「ええ……………？ 何で今日会ったばかりのお前にそんな命令をされないと」

「だって……………だってわたしは……………」

「おう、何だ」

「……………聞いて、くれる？」

「だから聞いてんじゃん」

「幼馴染ならいろいろ知ってるんだよね？」

「まあな、幼稚園の頃から一緒だし」

「そんなに付き合い長いなら、私に協力してくれるよね？」

「当たり前だろ。小学校の時なんかみくがトラブル起こしたとき、代わりに俺が上級生にボコボコにされたくらい後ろに付いて周ってたくらいだ」

「あ、ありがとう！ なら私ちゃんと言うね……！」

「ちょおおおおい待てよオ！！ 今なんか変な事頼みやがらなかつたか！？ お前とは初対面も良いところだろ！」

上手く気を逸らされたのが変な同意をってしまった。ただそれで俺が死ぬわけじゃない。

ただ無視すればいいはずだったが、この女は続けて言い放ちやがったのだ。

「わたしは……みくちゃんの事が 本気で好きなんですっ！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2682z/>

---

クーゲルシュライバー！

2011年12月11日23時45分発行